
俺の精一杯の背伸び

ナルシスト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の精一杯の背伸び

【Nコード】

N50750

【作者名】

ナルシスト

【あらすじ】

誰だって、多分望むことは一つだけ…。これはそんな単純な物語。

プロローグ

見渡す限り家の屋根、屋根、屋根。ここは、世界で一番高い場所。値段でも地位でもない、ただ単純に世界が見下ろせるくらい高い場所。人もいる。物理的に見下ろせている。こんな単純なことだからこそ、今俺はとても嬉しい。俺は待っていた。何年も。こんな風にも人を見下ろすってことを。でも、この単純が単純に今叶っているということは、この結果も何となく分かっているわけで。だって世の中そうそう上手くないかってのは、よく知っているから。ほら、だんだん、だんだん――。

一章 ○第一話 introduction

ピピピピピピピピピピ…。

「……。」

ピピピピピピ…。

「…………。」

ピピピピピピ、ガシヤン。

「…ふああ。」

あつ、えつと…おはようございます。初めまして。俺、藤也^{トウヤ}って言います。突然、布団の中からですいません。まだちよつと俺眠いんです。だから…二度寝を…させて…くだ…さ…。

って、こんな事してる場合じゃねえ。

俺の二度寝を推進しようとする春の柔和な風と、まだ温もりの残っている布団から脱却し、意識を集中させて目を覚ます。

目をこすりながら昨日の疲れを癒した体を起こし、ベッドから降りたそのままの足で、1階の洗面所へ向かう。

「おはよつ、お兄ちゃん。」

洗面所に着くやいなや、聞き慣れた声に出迎えられる。妹の柊^{ヒイラギ}だ。頭の上の方から垂れているポニーテールを揺らしながら、俺の挨拶を待っている。

「ああ、おはよう、柊。」

身長155cm。チャームポイントは大きな丸い瞳、ポニーテールを束ねている虹色のリボン、愛らしい笑顔、このくらいか。いか

んせん妹だ。あまり特徴を挙げるのも恥ずかしい。ただ、男から見
て、結構可愛いんじゃないかな……。うん。いや、妹なんだけど
…。

「あ、ごめんねっ、お兄ちゃん。もうちょつとで終わるから。」

と言った柊は、俺が考えている事も気にせず自分の前髪を3、4
回クシで優しくといてから、

「お待たせっ。」

と言って、台所に向かって行った。

俺は空になった洗面所に入り、いつものように洗顔諸々を済ませ、
朝ご飯を食べるべく居間へと足を向けた。

柊の立つ台所からは柊お手製の朝ご飯の発する、食欲を誘う香りが
まるで目に見えるように漂っている。

「朝ご飯出来たよー。」

という柊の声に対して、俺は

「いつもありがとな。」

素直な感謝を述べて、食卓につく。

「えへへー、さ、食べよ？」

「ああ、いただきます。」

柊は朝ご飯だけでなく、3年前から旅行に行きっぱなしの俺達の
両親に代わり、お昼のお弁当、夜のご飯まで三食作ってくれる。

その両親は、ってゆーと。今はイギリスかどこかにいるらしい……。
まあ、毎月手紙は届くから俺達は捨てられた訳じゃないんだろうけど。
まあ、超放任主義ってところだろうか。余程自分達の育て方に
自信があったのだろう。そのせいなのか、おかげなのか、気楽とも
自由とも言える生活は送れているのだけけど。

最初にご飯も当番制だった。当時、俺は中学二年生で柊も中学一
年生ということもあり、当番で作る料理もどっちもどちな味だっ
た。ある日、風邪で寝込んだ俺に作ってくれたお粥がきっかけで柊
が三食作ってくれるようになった。というか柊が作らせて欲しいと
懇願してきたからなんだが。今でも思い出せるのは、その時のお粥

の味。美味しいと言うのとはベクトルが違うような、いや、美味しかったのだけど、今まで会ったことのない味だった。まるで未来から来たような。俺は多分それを貪るように食べたのだと思う。それが柊の料理人としての火を点けたんじゃないかって俺は解釈している。

何にしても、三食作ってもらうことには大変感謝している。

若干申し訳ないとも思ってる。何にせよ、俺のせいも入っているんだから。

「…いちゃん？お兄ちゃん？」

「ん？どした？」

「あっ、いや、ぼーっとしてるから。」

「ああ、わりいわりい。」

止めていた手を動かしながら言う。

「ちよっと、考え事をな。」

「考え事？」

「コレが柊に…あ、いや、柊、いつも美味しい料理ありがとな。」

「えっ、あっ、急に…そんなこと言われると…て、照れるよ…。」

「思ったことを言っただけだ。」

「変なこと思わないでよ…。」

申し訳ないって思うのは、無粋だったかな。微かにそう思った。

「…もう。お兄ちゃんてば…。」

まだ照れている。相変わらず可愛い。いや、だから、妹だって。

柊は尚もぶつぶつ言いながら顔を赤く染める。それを見ながら、俺は再び手を動かす。

「…もう……。あっ……。！！」

急に、小動物のように体を起こしキョロキョロする柊。その目は、時計を捉えると30秒停止した。

「お兄ちゃん…。」

「どしたー？あ、このトマト美味しい。」

「……………遅刻するよ！！！！」

「ああ、チコクって言うのか、このトマト。変わった名前だなー…
って、え！！！？」

「ばかやってないで早くいこっ！！」

「…ばかやったつもりはないんだが…。んなこと言ってる場合じゃ
ねえな。行くぞ、柊！！あれやる！！」

家を全速力で出て来るときに確認した。現在時刻8時30分。4
0分になると教室にはもう入れない。自転車、全力でこげば、10
分。さあ、間に合うか。家の施錠をした柊が走って、俺の自転車の
荷台に乗っかる、と同時に俺は地面を蹴って、こぎはじめてから全力
を出す。

今日も間に合うといいな…。

そう思いながら、俺は朝から足に乳酸をためるのだった…。

○第二話 gathering

「…はーっ、はーっ。」

薄い茶色の木にニスを塗ったようなテカテカとした机に突っ伏しながら俺は息を整える。

危なかった。本当に今日は休日になるかと思った…。俺と柊が通っているこの学校―私立城花学園―では遅刻は欠席となる。どう頑張っても、門が閉まると中には入れなくなるのだ。現に去年は何回、不条理な欠席をしたことか。去年は柊も入学してなかったから、寧ろ欠席になったのは嬉しかったんだが、今年は柊がいるからな。迷惑かける訳にはいかない。という気持ちもあるし、まあ、新学期早々変な欠席をするのもな…。

「おっす、藤也ー!!!」

額に机が当たった、いや机に額が当たった。いや、叩かれた衝撃で、机が額に強打した。勿論朝からこんなことをするヤツなんて決まってる。

「いってーよ、葵!!!」

タガアオイ
多賀葵だ。身長170cm。性別、男。性格は乱暴。見た目はスポーツマン、中身はオタクな、まあなんとも気持ちの悪いヤツである。

そんなコイツとは高校入ったばかりに出来た悪友の一人であり、運命とはまったく不幸なものである。人付き合いが苦手な俺に声をかけてくれるのはありがたいんだが、暴力は別問題だ。

舌打ちしながら顔を上げた俺の目の前には、

「大丈夫？ 藤也くん・・・？ 思いつきり、音したけど。はい、湿布。」

「

サクラリンドウ
こいつは佐倉竜胆。こうやって細かい気遣いが出来るやつだ。男でもこういう優しさには正直ドキっとくるものがある。そんな彼は、俺や葵が羨むようなイケメンで、オマケに優しいってもんだ。モテ

ないわけがない。噂ではファンクラブまであるらしい。だが、不思議とこいつに彼女がいたって聞いたことがないな。高嶺の花って感じなのかな。

「ありがとよ、竜胆。でも湿布はいらん。そもそも何で湿布なんて持ってるんだよ。」

「えー、社会人の常識でしょー？」

「どんな常識もってんだお前・・・。」

「社会人は、財布、携帯、ハンカチ、ティッシュ、湿布、絆創膏、包帯にオキシドール、ポビドンヨード液、塩化ベンゼトニウム・・・。」

竜胆は、茶色の大きな瞳を爛々と輝かせて、自分のカバンの中から次々と物を出している。楽しそうだな。はは・・・。
あつという間に、俺の額がぶつかった机は竜胆の持ち物でいっぱいになった。

「どーすんの、これ・・・。」

葵が呆れたように、俺に聞いた。

「バカ、俺に聞くなよ。本人に聞いてみるよ。」

「いや、だってコレだぜ。」

葵は竜胆を横目で見ると、俺も葵につられて竜胆を見る。

「あー、自分の世界に入っちゃってるな。」

「だろ？ 藤也、とりあえずコレを片付けようぜ。」

「そうだな。」

そういつて、ポビドンヨードと書かれたビンに手を伸ばした瞬間、葵が声をかけてきた。

「そーいや、藤也。今日はお楽しみの身体測定の日だよなあ？」

思わず、掴んだビンを落としそうになる。こういうのは冗談でも止めてほしい。

「う、うるせえ。とっとと片付けるぞ・・・。」

横で自分の世界に浸って、悶えてる竜胆のカバンに机の中にあるものを強引に押し込む。竜胆は腕を自分の体に回しクネクネしてい

る。葵がやると気持ち悪いだろうが、竜胆がやってもなんとも思わ
ん。流石、イケメンパワー。」

「それでよ、藤也。今日は……。」

「おー、竜胆イケメン。変なポーズとっても葵と違ってきもちわ
るくねーなー、はははー。」

話を逸らさなきゃ。屈辱を受けることになるぞ……。こういう
動揺がもう屈辱なんだけど、それは気にしない約束。

「藤也あ。なんだよお。汗かいてるぞお。」

ニヤニヤしながら葵が聞いてくる。

「こ、コレは今日、遅刻するかと思って自転車で走ってきたからな
……。」

「おーおー、そんなに今日の身体測定が楽しみだったのかー。遅刻
すれば休めるのになー。」

「くっ……。」

「ダメだよ。葵くん。藤也くんをからかっちゃ。」

自分の世界に入ってたはずの竜胆が割って入ってくる。

「藤也くん、気にしてるんだよ？」

竜胆、それ言ったら、ダメなんだよ……。気にしてることを言
ったらダメなんだよ……。

「藤也くんがかわいそうだよ。」

おい、かわいそうって……。これはショックだぞ……。

「そうだよなあ。藤也クンはかわいそうだよなあ。にやにや。」

「そうだよ、わかってるじゃん、葵くん。」

おい、こいつら……。

竜胆は善意で言ってくれているんだろう。対する葵は悪意100
%だよ……。にやにやが口に出てるし。ふ、不思議だなー。善
意も悪意もどっちも傷つくよー。あははー。

「はあ……。今日は休めばよかったぜ……。」

溜め息しながら、俺は一人で呟いた。誰にも聞こえないような声
だったはずだが。

「まーた、そんなこと言ってー。しょうがないわね。」

隣の席の岩切椎^{イワギリシイ}が話に入ってくる。椎は前に向けてた顔を俺の席の方に向ける。同時に長い黒髪が綺麗に揺れて、ちょっとドキッとした。俺の方を見た瞳は、さっきのしょうがないという言葉とは裏腹に、かすかに微笑んでいる。椎と話すときはいつも感じる鼓動も聞こえる。

「どーせ、藤也が休んだって、私たちの背の方が高いってのは明確でしょ？」

「いや、それはそーだけだよ・・・。」

公衆で堂々と現実を突きつけられるのが苦手なんだよな。よくわからないけど、身長のこと絡むと俺は冷静でいられなくなる。

そんな俺の落ち込んだ顔に気づいたのか、椎は暖かい声で言った。

「ま、そんな結果気にしないわよ。藤也は藤也なんだからねっ。」
ニコっ。

椎は、満面の笑顔でそう言った。

ドキッなんてもんじゃない。心臓が破裂しそうだ。自分の顔が赤くなっているのが感じる。

同時に、嬉しかった。椎がこんな風に思ってくれてたなんて。赤くなった顔が、色に合って熱も帯びる。

「椎・・・。」

「ちょ、ちょっと！！なんで泣きそうになってんのよ！！勘違いしないで！！べ、別にこれは一般論なんだから！！だ、だいたいね、藤也は・・・！！そ、そんな顔似合わないって思った・・・だけ。って訳でもないんだけど・・・。」

さっきの優しさと取って代わって、叫ばれた。びっくりした。最後にもよによ言っただけのは聞こえなかったけど、あんまりいいことじゃないだろう。

椎の顔は、俺の顔より赤くなっている。自分の顔は見えてないけど、人間では考えられないくらい真っ赤になっている。真似できないという意味で多分俺の顔より赤くなっている。

「椎いゝ・・・。」

「うああ!! だから泣くなあ!! もう、どーすんのよ!! あんた達からも何かいってよ!!!」

椎の悲痛な叫びは空しく葵に消された。

「リア充夫婦共はほっといて、先行こうぜ、竜胆。」

「・・・葵くん。リア充ってなんだい？」

「リア充って言うのはな・・・。」

「アンタみたいなヤツのことよ。」

「柳ちゃん？おはよー。」

タカトリヤナギ

高取柳は竜胆に言った。

「リア充って言うのは、佐倉、アンタみたいなヤツのことって言うてんの。」

「僕みたいなの・・・？」

竜胆は首を傾げている。俺も実際、柳と葵が話すような言葉はよく分からない。

「ま、ホントのリア充はリア充って言葉が分からんものだぜ。」

葵は笑いながら竜胆にそう言った。

「そ、それよりさ、多賀。昨日の新参の歌い手さんって見た？」

「ああ、ランキング上がってたやつか。すげえよな、アレ。デスボイスで演歌歌うとは思わなかったぜ。」

「そう、それ。一瞬であたしファンになっちゃったよー。宣伝も1000ポイント使っちゃった。」

「お前、マジじゃねーか。」

「一生貢ぎますキリッ。」

葵と柳が話しているのは、おそらくニゴニゴ動画と呼ばれる動画共有サイトのことだろう。前に葵に見せられたが正直分からなかった。同様に椎も竜胆も分からんだろう。今この場合は、完全に葵と柳の舞台だ。俺らはこの話題を出されると観客、いや、観客と言っても静かなコンサートの客のような。要は、喋れない。関係のないことを椎や竜胆と話そうとしても出来ない。そんな空気なんだ。完全

放置ってやつだよな。

椎もさっき叫んだことを忘れたかのように呆れている。俺も叫ばれたことを忘れて呆れている。竜胆は・・・さっきのリア充って意味を考えているのだろうか、葵と柳の会話を聞いているのかニコニコ笑顔を作りながらも、首を傾げたりしている。こういうとこって竜胆らしいよな、なんて一人で思っている。

「おーい、朝のHRはじめるぞー。」

と担任の先生の声。

話に夢中だった葵と柳も、傍にいた竜胆も蜘蛛の子を散らすように帰っていく。

身体測定は1時限目か・・・。椎にあんなこと言われたとは言え、嫌なもんは嫌だ・・・。

それにしても椎の笑顔、可愛かったな。

今度は椎に聞こえないように声にも出さず、

「っはー、遅刻すればよかったな。」

と口を動かしてみる俺だった。

○第三話 s m a l l e s t

俺の名前は五稜藤也。ゴリョウトウヤ

身長は150cm。マイナス5cm。

周りは俺より背が高い。当たり前か。高校2年生の男子ともなれば、170cm前後が平均ほどであろう。現に、皆よりボーリング球一つくらい俺の視界は低い。

背が欲しい。せめて、小学生に間違われなくらい。

しかし、この問題はいささか愚問である。背の小さい俺のようなヤツでも、背の大きなヤツには出来ないことがあるはずである。隣の芝は青かったとよく言うように大抵、背が大きいやつもまた、小さくなりたいと思っているものだ。

なんてコトは、自分で考えたし他人にも何度も言われた。

こんなことは理解はした。でも、納得はしていない。

第一納得したところで、いや、そりゃちょっとは気が楽になって生きやすくなるとは思うけど、背が小さいという一番の問題は解決していない。

だからといって、一日二日で伸びるようなものではないし、伸びるようなものだったらここまで悩んでいない。結局は納得するという方法しかないのだろうが、その方法に納得できないというのもまた事実。だから、俺は夢を見た。

朝見た夢。街を、人を、すべてを見下ろしている夢。これが俺の生きる上での夢でもある。いつか、本当に、自分が頂点に立って、万物を見下ろしたい。夢というより聞き方によっては野望にも聞こえるコレは、想像しているだけで気持ちが悪く落ち着く。単純な人間と言われれば否定は出来ないが、俺の見てくれは小学生なんだ。大きいヤツには出来ないことつつつたらこれが一番お似合いだろう。

小学生のような大きさの高校生が高校生の頭を使って考えた小学生のような夢。

朝見たその夢はよく見る。その度にこんなことを考えるから、すっかり考えのルートが定まってしまつて、結論はいつもここに行き着く。まあ、自己満足である。夢を持ち続けていれば可能性はゼロじゃないと思うから……。

結論に一区切りがついて、溜め息をふうつ、と吐いた瞬間。今、身体測定の間かと思ひ出したと同時に、

「五稜藤也。」

若い体育教師の声が俺を呼んだ。身長計の横にたつて顔はめんどくさそうにしている。

どーせ去年と変わらねえって思つてんだろ。俺も思つてるよ。腰を敢えて軽く上げてすたすたと身長計にむかう。

「返事はどうした。五稜。」

「はい。」

「145cm。」

「ありがとうございますー。」

「次、佐倉。」

竜胆は測定が終わつて帰る俺とすれ違い、廊下でまつてて、と俺に言い身長計に向かつていった。

測定室である保健室からでて、春とはいえすこし肌寒い廊下で竜胆と葵を待つ。

145cmか。期待してなかったけど、へこむ。いや、へこむってことは期待してたってことだろう

。期待しないわけじゃないじゃん。と開き直っていると、竜胆と葵が同時に出てきた。

葵は心底嬉しそうにニコニコしている。葵は身長が伸びていたのだろうか、いや、こいつの場合そっちより、

「藤也、何落ち込んでんだよお？お？お？」

やっぱりコレだろ。コイツは人の不幸を食う鬼か。

「なんだよ、ニヤニヤして。今そんな気分じゃねーよ。」

「つれないぞう。藤也くうん。」

子供みたいになコニコしながら肩に手を回してくる。

「葵、気持ち悪いから。」

「まあまあ、藤也くん。」

竜胆も笑っているが、葵とは明らかにベクトルが違う、微笑みを浮かべながら言った。

「葵くんはね。藤也くんのことをねームグッ」

「バツ、竜胆、言うなッ！」

葵は目に見えるように焦って、手で竜胆の口を思いっきり押さえる。葵は自分が焦っているのに気づいて、俺のほうに顔を向け、いやーあはは、と頬を引きつらせながら言っている。

「何してんだ、おめーら。」

「だから、葵くんは、藤也くんのことをすごい心配してたの。」

いつの間に葵の束縛から離れたのか、俺の隣で竜胆はそう言う。

葵は俺の目の前にいて、今、捕縛していた人間が急に消えるようにいなくなつて、自分の手をみつめて信じられないという顔をしている。

「ね？ 葵くんっ。」

ニコっ。

今朝、椎が見せたときと似たような笑顔で竜胆は葵に言って、俺にも微笑んだ。

「葵……。」

「ご、誤解されちゃったら困るな！これは、その、友達としてお前が元気じゃねーと、いや、オレが住みにくい、っていうか、その、気まずいっていうかそーなるだろ！だから、ね、ネタにしたんじゃないか、笑いにすれば、悩みも軽くなんだろ！って、あれ、いや、そんなことは思っていないっていうか、いや、竜胆、そう、竜胆が思ってる、な、竜胆！」

「うんっ。」

「まったく、こいつら……。」

「葵。ありがとな。竜胆も。」

「いやっ、ちがつ、コレは本音じゃなくて一般的に言ってるんだよ！」

「葵くん。支離滅裂ー。しかも朝の椎ちゃんみたい。」

葵は確かに椎並に顔を真っ赤にしている。対する竜胆はこれがかつてたかのように、涼しい顔でニコニコしている。

「うっせえ、竜胆！か、帰るぞ！」

葵は言い捨てて、早足で竜胆を連れて教室に帰っていく。

俺は廊下に一人取り残されてから、考えてみる。さっきのような肌寒さは何故か今は感じない。

そうだな。へこむって言うのは、俺自身が期待してるからだよね。で、期待するって言うのは、俺を心配してくれているヤツがいるわけで、俺一人が期待するぐらいならここまで、へこむことはないだろう。心配してくれるヤツがいるから、そいつらの期待まで裏切りたくないから、俺はここまでへこむんだろう。上手く言葉に出来ないけど、こういうのが『絆』ってやつなのかな。お互いを信頼して、助け合って、暮らしていく。一体となって、でもそのなかで個性はちゃんとあって、それをお互いに理解している。大袈裟かもしれないけど、俺は今、葵と竜胆とそういう関係になることが出来ていると認識できた。

竜胆は素直に言ってくれるけど、葵はいつも遠まわしに言うからな。。。。

まあ、それがあいっらしいし、あいっだって、別に俺を困らせようとかそういうことは一切ないように感じる。

だから、からかわれることが分かって、俺は測定が終わった後ここで二人を待っていたんだろうな。意識はしなかったけど。

逆に、無意識にそういうことが自分も出来ていたと思うと、『絆』をまた確かめることが出来る気がして嬉しくなってくる。

ありがとな、葵。竜胆。

「これからもよろしくな。」

誰もいない廊下に呟いて、俺は赤面しながら教室へ足を向けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5075o/>

俺の精一杯の背伸び

2011年1月4日07時25分発行